

# 雪下のマグマ

## 伯爵夫人の自叙伝

マリー・ダグレー  
近藤 朱蔵 訳 著

青山ライフ出版

MÉMOIRES, SOUVENIRS ET JOURNAUX DE LA COMTESSE D'AGOULT

Présentation et notes de Charles F. DUPÊCHEZ

©Editions Mercure de France, 2007

This book is published in Japan by arrangement with MERCURE DE FRANCE,  
through le Bureau des Copyrights Français, Tokyo.

# 足利文庫

本書は *Mémoires, souvenirs et journaux de la comtesse d'Agoult, (Daniel Stern)*, présentation et notes par Charles F. Dupêchez, nouvelle édition augmentée, revue et corrigée, Mercure de France, 2007。本文は、九頁～四四六頁の本編の部分の紹介は付された巻末の注釈を記したものである。ただし、一頁から始まる「第一巻くの付録」の一部は翻訳した。底本の前身は「一巻からなる単行本 (*Mémoires, souvenirs et journaux de la comtesse d'Agoult, Daniel Stern, I, II, Mercure de France, 1990*)」だつたので、「第一巻くの付録」も相変わらず称やれてゐる。底本のテクストに疑問が生じた場合、その出版元 kindle 版 *Mes Souvenirs* を参考にした。なお、底本後半の Annexes(四四七頁～七二一頁)の注釈も notice biographique(七～八頁)まで一八八年、拙訳『巡礼の年 リストル旅した伯爵夫人の日記』として、一〇一八年に青山ライフ出版から刊行されたので、本書と合わせてほぼ原書は完訳できたことになる。

注釈について：マリー・ダグー自身がつけた注は\*が付されてゐる。原著の「トーベル氏による注は(1) (2)など」と番号が付されてゐる。訳者がつけた注は「訳注」あるいはあるが、アーヴィング氏の注にわざと注を加えた場合(a) (b)などという記号を付した。

しばしば補足資料として引用したのは『ダグー伯爵夫人往復書簡全集』と『トーベル・リストル＝マリー・ダグー往復書簡集』である。前者は *Marie de Fravigny, comtesse d'Agoult, Correspondance générale*, Honoré Champion, 2003 ～。〇一一年一月現在、第一巻（一八六年）が刊行されている。後者は *Franz Liszt, Marie d'Agoult, Correspondance*, nouvelle édition revue, augmentée et annotée par Serge Gut et Jacqueline Bellas, Fayard, 2001 。

五六二通の書簡が収められている。

目次に簡単な要約がついているが、底本では各章の冒頭に置かれていたものを読書の便を考えて目次に移したものである。ただし、（）がついているものは訳者によるものである。

#### 底本編者による注記

星印のついた、頁の下の注は原著にあつたものである。原著（死後出版なので著者が読み返すことは決してなかつたということを思い出しておこう）でイタリック体で表されている語は正確に再録した。常に印刷上の厳格さに従つたというわけではなく、私たちの考えでは、ダグー伯爵夫人が原稿で下線を引いた語をイタリックにしたのだろう。一方、原稿を基にしたテクストでイタリックにしたのは、ダグー伯爵夫人が下線を引いた語、外国語由来の語と作品の題名、新聞名である。大括弧「」に語や句が入っている場合は読解に必用な補足である。

#### 訳者の注記

底本でイタリック体になつているものは「」をつけた。「」は「」のままである。

# 目 次

訳者まえがき ..... 1

序文 ..... 11

## 第一部 若き日々（一八〇六—一八二七）

15

I ..... 16

私の父 父方の先祖 『ラ・ビブル・ギヨー・ド・プロヴァン』『慰謝<sup>コンソランオ</sup>』の作者 グラシアン・ド・フラヴィニーー子  
爵フランスに於ける脱走と脱走兵に対する刑罰に関する考察 ソルボンヌの博士 パルムの大使館  
九三年の断頭台 フキエ＝タンヴィル・フラヴィニー家の女 レ・ヴィユー前伯爵夫人

II ..... 27

ベートマン家 父の勾留<sup>デモ</sup>と結婚 フランスへの帰国 私の姉 私の兄たち 私の誕生  
「真夜中の子供たち」 導きの靈 幸せな幼年時代 トゥレーヌとモルチ工城

III ..... 38

田園の楽しみ 動物たちに親しんだこと 鳥小屋 アンゴラ兎 猪の子 庭師の口バ 「ジエネルーズ」  
「地下道」 毛虫と蘭 早くから変容という考え方になじんだこと 落ち穂拾いと「アルボタージュ」  
ドイツ料理 アーデルハイト マリアンヌ 私の庭 最初のドイツ式兼フランス式教育 馬車の旅  
私の「ミネルヴァ」 ブルボン家の帰還 百日天下 フランクフルトとヴァンデへの出発

ベートマン家 「老婦人」 伯父さん 「バーグレルホフ」と「フォーゲルシュトラウス」 スタール夫人登場  
祖母の編み物 ホルヴェック伯母さん トルヴァルセンの浅浮き彫り 私はカトリックなのか?

エンゲルマン寄宿学校 徒姉妹のカタウ 色男たち 深紅色の「シマル」 ゲーテの祝福

モルチ工に帰る ヴアンデ派 超王党派 ラ・トレムイユ公 狩り 「ミロール」と「フィガロ」  
ザリガニ捕り 野生の雌犬 小さな行商人 完璧な友情

初聖体拌領 父方の祖母 ラトワールのパステル画 「モロンが退屈させる」  
私の洗礼の有効性に関する疑い ルジヨ神父

独仮の教育 ダンスの師匠アブラアム氏 フエンシングの師匠ドナディユー嬢 ゴルチ工神父の学校  
ファニー・セバスチアーニ、ヘンリエッテ・メンデルスゾーン プララン公爵夫人の死 フォーゲル先生  
ドイツの音楽

こうそり本を読む 私の仲間エステルとアドリエンヌ 愛の秘密 私の兄

私の庭は理想主義、兄の庭は現実主義 フィエヴェ氏 テオドール・ルクレルク氏 喜劇 死

## X

120

フランクフルトと「帝国議会」の宴 シャトー・ブリアン氏 ユダヤ人に対するフランクフルト人の偏見  
 「ゲットー」「アムシェル・ロートシルト」の訪問 「老婦人」の怒り

## XI

133

ビロン館 サクレ＝クール修道院 ヴァラン神父 ウジエニー・ド・グラモン様 アントニア様

## XII

143

私の信心 マリアの子供たち ファニー・ド・ラ・ロシュフーコー アデリーズ・ド・X\*\*\*  
 アントニア様の花束 学問賞と徳行賞 談話室 外出 トレムイユ妃 私の姉オーギュスト  
 レオン 修道院との別れ

## XIII

161

私は十六歳 母と私の対立 血の法則 私の信心 コエサン氏とその一派 ガラール神父と「愛の井戸」  
 私の小説は消えてしまった

## XIV

172

フランス式結婚

## XV

180

結婚相手としての私の価値 結婚申し込み 真実の愛 ラガルド伯爵  
 たつた一言が運命を変えることができる

## 第二部 社交界——宫廷とサロン——流行(一八二七—一八四九)

201

前書き(一八六七年に書かれた) ..... 203

I サン＝ジエルマン街の社会 ..... 205

II ..... 210

ブルボン家の王族 ルイ一八世 シャルル一〇世 宮中での拝謁 王太子妃  
ベリー公爵夫妻 パレ＝ロワイヤル シャルトル公爵とワレウスキ伯爵  
王家の内輪の夜会

III ..... 230

老寡婦たち ラ・トレムイユ大公夫人 モンカルム侯爵夫人 モンモランシ一家  
サン＝ジエルマン街での若い娘たちの舞踏会

IV ..... 240

XVI ..... 190

私の悲しみ どのように私の気を晴らそうしてくれたか  
ブーロニュの森今昔 イギリスの小説

イタリアの麦わら帽 ローマのモザイク

XVII 私の結婚 ..... 196

V	文学サロンと音楽サロン ロッシー・マリブラン夫人 ゾンターグ嬢 ソフィー・ゲー夫人 デルフィーヌ・ゲー夫人 エミール・ド・ジラルダン氏	252
VI	近づく革命 『ウイリアム・テル』初演 ケーラ伯爵夫人 ポリニヤック公	257
VII	マイー館 七月革命の日々 「むかしむかし王様とお后様がいらっしゃいました。」	267
VIII	サン＝ジエルマン街のふくれつ面 ロザン公爵夫人のサロン ブドロ街のサッフォーとマラケ河岸通りのコ リーヌ クロワジー城 喜劇 演奏会 アルフレッド・ド・ヴィニーの朗読会 才知ある女性 サロンという野望 サロンの大物	282
VIII	教会の母たちと小母さんたち ベルジョイオーゾの奥方、レカミエ夫人とアベイ＝オ＝ボワ ブリフォー氏 民主政体における女性とサロン	282
E	第一巻への付録	295
F	ルノルマン嬢(1)訪問記	296
(ゲーテとデモニーッシュなもの、古代のダイモン)		299

G	...	
(ラ・トレムイユ公の怠惰な狩について)		
H	...	
モーリス・ド・フラヴィニーーの手紙 (ロンドンより)	301	301
I	...	
モーリスド・フラヴィニーーの手紙 (ストラスブルより)	304	304
K	...	
(ゲーテの彫像を再び見て～ソネット)	305	305
第二卷への序文	307	307
第三部 情熱(一八三三～一八三九)	313	313
序文	315	315
I	...	
II	...	
III	...	
	317	317
	323	323
	330	330

## 第四部 不確かな年月 文人生活（一八四〇—一八四七）

363

IV	...
V	...
VI	...
VII	...
349	344
341	334

### 前書き

I ..... 365

前書き ..... 364

パリへの帰還 躊躇 提案と忠告 ラムネー神父 サンド夫人 エミール・ド・ジランドン氏  
私の最初の文学的試み 『ネリダ』 ベランジエ

II 薔薇館 ..... 398

## 第五部 私の精神と本

409

## 第六部 私の敬意と好奇心

415

最後の思索 ..... 417

前書き(I) ..... 417

I	...
II	...
III	...
IV	...
解説 シャルル・F・デュペシェ	...
訳者あとがき	...
参考文献	...
マリー・ダグー年譜	...
索引	...
	455
	452
	438
	427
	425
	424
	421
	418